

甲申戊寅。眞爲殺印相生。庚寅癸丑。也坐兩神興旺。

032

《甲申と戊寅は、殺と印が相生じ真となす。庚寅と癸丑は、また兩神が旺を興す。坐す。》

※也〈ヤ〉…また。中世以降の用法。

※兩〓兩〈リヨウ〉…〈名詞・形容詞〉ふたつ。両方とも。

※興〈コウ・キョウ〉…〈動詞〉おこる。おきる。盛んになる。

※卻〓却〈カク・キヤク〉…〈副詞〉かえつて。ところが。〈動詞〉しりぞく。後に引つ込む。しりぞける。引つ込めさせる。  
／かえる。かえず。もとへもどる。

※據〓拠〈コ・キョ〉…〈動詞〉よる。よりどころにする。〈名詞〉よりどころ。たよりにするところ。

※安〈アン〉…〈副詞〉いづくに。どこに。／いづくんぞ。どうして。

※頓〈トン〉…〈動詞〉とどまる。とどめる。ずしんと腰を下ろす。

※格〈カク〉…〈名詞〉しんぼう。芯に持つ本質。推命で「格」といった場合、「格局」を指すことが多いが、ここでは通常の意味で使用されている。「格格」は、こつこつとつかえる。つきつめる。鳥の鳴く声。

※忽〈コチ・コツ〉…〈動詞〉ゆるがせにする。気に留めないさま。放置する。〈副詞〉たちまち。いつのまにか。うっ

かりしているまに。

【解説】

十二支の蔵干の構成の考え方には数説あり、『滴天髓』の著者がどのような蔵干を採用していたかは明言されていないのですが、原文から清代の書である『星平會海全書』に掲載されている蔵干とほぼ同じものを採用していたのではないかと推察できます。その『星平會海全書』の蔵干によれば、右原文中にある干支は次のようになります。

甲 申（己戊壬庚） 戊 寅（戊丙甲）

庚 寅（戊丙甲） 癸 丑（癸辛己）

原文にある〈殺と印が相生じ〉とは、天干から見て官殺に当たる干が印を生じ、その印が天干を生じる関係のことです。つまり、甲申の場合、蔵干の庚金は偏官・七殺で壬水は印（偏印）ですから、金水と相生して、申の本気の庚・偏官が天干の甲木を剋するのではなく、官殺から印へ相生して、結果的に天干の甲木を生じ助けていると見ているのです。残りの三十支においても、一応蔵干中に殺と印がありますが、甲申・戊寅と庚寅・癸丑では、同じであるようで同じではない、その違いを見極め

る必要がある、というのが、この原文の主旨のようです。なお通常、「印」は、偏印もしくは印綬（正印）を指しますが、「殺」は、偏官・七殺を指し、正官は含みません。

原註には次のようにいわれています。

兩神者。殺印也。庚金見寅中火土。卻多甲木。而以財論。癸見丑中土金。卻多癸水則幫身。不如甲見申中壬水庚金。戊見寅中甲木丙火之爲眞也。

《兩神は殺印なり。庚金が寅中の火土を見る。却つて甲木多きは、しかしして財を以て論じる。癸が丑中の土金を見る。却つて癸水多きは、則ち身を幫ける。甲が申中の壬水、庚金を見、戊が寅中の甲木、丙火を見るに如かず。これ眞と爲すなり。》

まず〈兩神は殺印なり。〉といい、〈兩神〉の意味を明確にしています。そして原文とは逆に、庚寅、癸丑の干支を先に採り上げ、次のように、その問題点を指摘しています。

その問題点は、原文の〈兩神が旺を興すに坐す。〉といわれている点にあるとしています。その理由として、〈庚金が寅中の火土を見る。却つて甲木多きは、しかしして財を以て論じる。癸が丑中の土金を見る。却つて癸水多きは、則ち身を幫ける。〉「庚金から見て、寅中の火土は殺印にあたるもの、寅中の財の甲木が多ければ、殺印ではなく、財を論じなければならぬことになる。癸水から見て、丑中の土金は殺印にあたるもの、蔵干の比劫の癸水が多ければ、殺印ではなく比劫の幫を論じなければならぬことになる。」と述べています。

そして、甲が申中の壬水、庚金を見、戊が寅中の甲木、丙火を見るに如かず。これ真と為すなり。よい、これ真と為すなり。といっているのは、蔵干の本気と中気に殺と印があるからで、庚寅と癸丑は、甲申と戊寅と蔵干の構成が一見似てはいても、真ではないといっているのです。

なお右原文に掲げられている四つの干支の中で癸丑は例外的であると考えられます。丑の場合、本気の己土が旺じることがあるのは、他の三つの干支と同じなのですが、余気の癸水が旺じ、水旺になることがあります。つまり丑月には、水旺と土旺があり、他の三干支とは全く蔵干の構成とその意味合いが異なります。この点にひと言も触れられていないことに疑問を感じます。

次に任註を見ておくことにします。

支坐殺印。非止此四日。如乙丑辛未壬戌之類。亦是兩神也。

《支が殺印に坐すは止だ四日に非ず。乙丑、辛未、壬戌の類の如き、またこれ兩神なり。》

原文に挙げられている四つの干支だけが〈殺印に坐す〉のではないとして、さらに三つの干支を例示しています。これも『星平會海全書』に掲載されている蔵干を参照して明示しますと、次のようになります。

乙 丑（癸辛己）      辛 未（丁乙己）      壬 戌（辛丁戊）

任註の指摘の通り、右のいずれも蔵干中に殺と印が蔵されています。ただし原文でこの点に触れられていないのは、見落としてはなく、文字数の制限のためもあるでしょうし、「手取り足取り、すべてをいわなくても賢明な読者であるならわかるであろう」という意図的なことではないかと思えます。

癸丑多比肩。戊寅豈無比肩乎。庚寅多財星。甲申豈無財星乎。非惟庚寅癸丑不眞。即甲申戊寅。亦難作據。

《癸丑、比肩多くして、戊寅、あに比肩無からんや。庚寅、財星多くして、甲申、あに財星無か

らんや。ただ庚寅、癸丑が真ならざるに非ず。即ち甲申、戊寅、また抛を作り難し。》

ますへ癸丑、比肩多くして、戊寅、あに比肩無からんや。〽癸丑、比肩多く、戊寅、どうして比

肩がないなどということがあるのか」といい、へただ庚寅、癸丑が真ならざるに非ず。即ち甲申、戊

寅、また抛を作り難し。〽「ただ庚寅、癸丑が殺印相生の真ではないのではない。甲申、戊寅もまた、

その真であることのよりどころは見当たらないではないか。」といい、原註にいわれていることに對して任註は全面対決の姿勢です。では、任註はどういう立場なのか、興味があるところです。

若只以日主一字論格、則年月時中。作何安頓理會耶。不過將此數日爲題。

《若し只日主一字を以て格を論じるなれば、則ち、年月時中、何ぞ安にか頓まりて理會すべしや。》

右を意識しますと、「原註にいわれているように日主の一字だけで、その四柱八字のあり方を論じることがゆるされるのなら、年柱、月柱、時柱は、どこにその論拠をおいて理會すればいいのか。」となります。これは正論で、四柱八字は全体を統観した上でその作用の良し悪しを論じるべきです。

原註のように四柱八字中の一部だけを探り上げて、「真」であるとかないとか、といった話ではできません。日本の推命では、安易な部分だけを採用した方法論が多く見受けられます。

続けて任註では、「殺」を視点の中心に置き、日干の強弱との関連を論じられています。しかし、〈何ぞ安にか頼まりて理会すべしや。〉と見得を切っている割には、期待はずれの内容でしかありません。以下、視点ごとに改行し、意識を添えておきます。

用殺則扶之。不用則抑之。須觀四柱氣勢。日主衰旺之別。

「殺を用いるなら、これを扶け、用いないのならこれを抑える。そのいずれを採るかは、四柱の氣勢と日主の衰旺のようすをみて判断する。」

如身強殺淺。則以財星滋殺。

「日干（日主）が強く、殺が弱いのなら、財が殺を生じるのがよろしい。」

身殺兩停。則以食神制殺。

「日干と殺の強さが拮抗するなら、食神で殺を制するのがよろしい。」

殺強身弱。則以印綬化殺。

「殺が強く、日干が弱いのなら、印綬が殺を化するのがよろしい。」

論局中殺重身輕者。非貧卽夭。

「殺が重く、日干が弱い四柱八字の人は、貧しくなければ、短命である。」

制殺太過者。雖學無成。

「食神が強過ぎて、殺をこころ尽く制する人は、学問の道に進んでも成功することはない。」  
論行運殺旺。復行殺地者。立見凶災。

「殺が旺じ、大運だいうんにおいてまた殺が旺じるなら、たちどころに凶災を見る。」  
制殺再行制郷者。必遭窮乏。

「食神が強く、殺を制していて、大運も食神に巡るなら、必ずきゆうぼう窮乏におちいる。」

書云、格格推詳。以殺爲重。又云。有殺只論殺。無殺方論用。殺其（不）が脱字？可忽乎。

「ある書にいわれている。つきつめて詳つまびらかに推おそうとするなれば、殺を重視することになる。また他の書にいわれている。殺があれば、ただ殺を論じ、殺がなければ、まさに殺の用い方を論じる。

殺はゆるがせにはならない。」

この原文と原註の論の主旨は、蔵干中に「殺」があつても、「印」があるなら「殺」と「印」が相生して天干を生じ、助けることができるということにあると考えます。ところが任註では、右のように「殺」の作用の説明に終始しています。これは明らかに任氏の勘違いか読み違いであると言えます。

ただし、右の任註の「殺」に関わる論義は、決して無意味なものではありません。ただ、「非貧即夭」とか「雖學無成」などと具体的な事象を断定しているところはいただけません。実証的に誤りであると言えます。

なお、任註最後の句の「殺其可忽乎」は、ここまでの脈絡からして「殺其不可忽乎」で、「不」が脱字していると考えられます。

なお日本には、この任註の事象に触れられた問題の箇所を秘伝のように、もったいぶって採り上げている書がありますので注意が必要です。

### 上下貴乎情協。

033

《上下が情に協かなうは貴とうとし。》

### 左右貴乎同志。

034

《左右が同ともに志こころすは貴とうとし。》

※貴…〈形容詞・名詞〉たつとい。とうとい。目立って大きい。値打ちや位くらゐが高くすぐれている。

※乎〈コ〉…〈助詞〉か。や。文末について、相手に対する呼びかけや、感嘆の意や反問を表わす助辞。

※情…〈副詞〉まことに。ほんとうに。〈名詞〉本当のこと。本当の姿。感覚によって起きる心の動き。

※協：〈動詞〉あわせる。力を一つにあわせる。／かなう。多くのものが一つに力を合わせる。

※同：〈副詞〉ともに。いっしょに。例えば、「同惜」は、ともに惜おぼしむ、の意。

※志〈シ〉：〈動詞〉ころさず。ある目標を目指した望み。あることを意図した気持ち。／しるす。書き留める。メモする。「同志」は、同じ意見・理想をもって行動を共にする人、の意。

※反：〈副詞〉かえって。反対に。逆に。

※反背〈ハンパイ〉：きまり・約束・指図などに背（そむ）く。

※錯〈サク〉：〈動詞・形容詞〉まじる。まじわる。たてよこにぎざぎざ重なる。乱れてそろわない。／あやまる。食い違う。間違える。

## 【解説】

『滴天髓』に、〈上下〉〈左右〉という密接な関連がある視点を論じている原文が続いています。ここではその二つを同時に採り上げ、解説することになりました。

まず〈上下〉を採り上げます。「干支かんし総論そうろん」という干支を論じているところで〈上下〉といわれているのですから、四柱八字の構成を考えるなら、〈上下〉とは、天干と蔵干のことであることは明白です。つまり『滴天髓』は、天干と蔵干の間に、生・剋・幫の作用が発生することを明言しているのです。

前文では「殺印相生」という視点から、天干と蔵干における生・剋・幫の作用が論じられていました。「殺印相生」という視点は、〈上下〉の看方に包括されることとなります。そしてさらに「左右」という視点が追加されているのです。

この二つの原文は、〈上下〉〈左右〉という視点から、四柱八字中の「隣接する」干と干の生・剋・幫の看方を、一般論として論じている箇所（かしよ）と考えられます。

〈左右〉とは、〈上下〉の理解からして、必然的に四柱八字中の任意の干から見て、その右と左にある干を指すこととなります。四柱八字は四つの干支から構成されていますが、四柱八字を構成する天干と蔵干を、生・剋・幫という動的とも言える作用の連関の中で、〈上下〉〈左右〉という視点から、干と干の関連を構造的に捉える必要があるといわれているのです。

この〈上下〉〈左右〉の視点は、現在においても実証的に必要欠くべからざるものです。この視点がないことは事象を論じることができなと言えます。こうしたところに、成立より七百有余年を経て、『滴天髓』が名著として、いまだその価値を保ち続けている一つの理由となつていっているのです。

最初の原文〈上下が情に協うは貴し〉に対して、原註には次のようにいわれています。

天干地支。雖非相生。宜有情而不反背。

《天干と地支、相生に非ずと雖も、情を有ち、而してかえつて背かざるが宜し。》

天干と蔵干の関係をみる場合、〈相生〉はよろしく、〈剋〉はよろしくないとされている推命の書が日

本には多くありますが、原註では生・剋の相違ではなく、〈背かざるが宜し〉<sup>よろ</sup>と書いています。つまり、剋してよろしい場合、生じてよろしくない場合もあるとされているのです。これは正論であると言えます。

任註には、次のようにいわれています。

上下情協者。互相衛護。干支不反背者也。

《上下が情に協うは、互いに相衛護し、干と支が反つて背かざるなり。》

任註は原註の論に追従しています。続けて〈相衛護し、干と支が反つて背かざる〉の例を解説しています。次は、その最初の句です。

如官衰傷旺。財星得局。官旺財多。比劫得局。殺重用印。忌財者。財臨劫地。

《官が衰え、傷官が旺じ、財が局を得る。官が旺じ、財が多く、比劫が局を得る。殺が重くして印を用い、財を忌むも、財が劫地に臨むが如し。》

〈官が衰え、傷官が旺じ、財が局を得る。〉とありますが、これを〈相衛護し、干と支が反つて背かざる〉の例としているのは、いかがなものかと思えます。〈傷官が旺じ、財が局を得る〉のなら、自ずと干は弱くなります。そのことを無視して〈背かざる〉と断じることではできないと言えるからです。続けていわれていることは、それなりに一理はあります。以下任註では、百字ほどを費やし、いろいろな場合を掲げ、論じていますが、右と類似した内容でしかありませんので省略することにし

す。

次の原文〈左右が同に志すは貴し。〉に對して、原註には次のようにいわれています。

上下左右。雖不全一氣之物。須生化不錯。

《上下と左右、一氣の物を全きせざるといえども、須く生化、錯らざるべからず。》

右のように、原註では〈左右〉のみではなく、前文の〈上下〉にも触れられています。評註として奇妙ですし、ここに至るまでこうしたことはなかったため、少し違和感を感じるところです。

ところで〈上下と左右、一氣の物を全きせざる〉とは、「上下・左右にすべて同一の五行がなくとも」という意味となり、〈須く生化、錯らざるべからず〉は、「生と化が適宜に行なわれないことはよろしくない」となりますから、その主旨を理解するのに、やや困難を感じます。確かに上下・左右の干が〈一氣〉「同一五行」であるなら、〈生化〉を考慮する必要もありませんので、至極単純でわかりやすくはなりますが、そうしたごく稀な状態を比較の対象として採り上げても、何も意味がないのではなにかと思います。この原註は理解に苦しみます。

任註には次のようにいわれています。

左右同志者制化得宜。左右生扶。不雜亂者也。

《左右が同に志すは、制化宜しきを得、左右が生じ、扶け、雜亂せざるなり。》

漢文の場合、文字数の制限がありますので、右のように短い一文中に〈左右〉が二度出てくるのは、

工夫が足りないのではないかと思ったりします。

それはともかく、任註は善意に解するなら、「左右の干が剋したり、生じたりすることが、結果的によろしく、雑乱しないことが望ましい」といつているのでしょう。続けて、前文と同様に、百五十文字ほどを費やし、いくつかの状態を例示していますが、採り上げるほどの意味合いが見当たらないので、ここでは省略することにします。

この『滴天髓』の二つの原文で、 $\langle$ 上下 $\rangle$  $\langle$ 左右 $\rangle$ といわれていることをわかりやすく図示しますと上図のようになります。四柱八字中において隣接する干は、 $\square$ 中の矢印の示すように、相互に生・剋・幫の作用を及ぼし合うということです。

日本においてこの理を拡大解釈して、「斜め」であっても生・剋・幫の関係が及ぶと考えている人もいます。「斜め」とは、例えば、日の天干と時の蔵干のような位置関係です。これは実証的に誤りであると断言できません。

また改めて言うまでもなく、例えば日の天干と年の天干は隣接していませんので、直接的な生・剋・幫の関係は発生しません。さらに言うなれば、日の天干から一番遠く、その影響が希薄なのは、年の蔵干ということになります。

この『滴天髓』へ上下へ左右への視点は、四柱推命で重要な概念の一つである「日干の強弱」を看る場合、欠くべからざるものとなるのです。

始其所始。終其所終。富貴福壽。永乎無窮。

035

《その始まる所に始まり、その終わる所に終わる。富貴と福壽は、永えに窮まること無し。》

※永…〈形容詞・副詞〉ながい。とこしえ。〈形容詞・動詞〉ながい。

※反…〈動詞〉かえる。かえず。裏返し。逆になる。／ひるがえる。ひるがえず。ひらひらする。／そむく。さからう。

〈副詞〉かえって。反対に。逆に。

※凡〈ボン・ハン〉…〈形容詞〉全体をおおっているさま。おしなべるさま〈副詞〉総じて。全体をおしなべて。／お

よそ、だいたいは、日本語特有の用法。

※忌〈ゴ・キ〉…〈動詞〉いむ。心中にはと抵抗を感じて嫌う。〈形容詞・動詞〉よくないと避ける。はばかる。

いまわし。

※帰〈ケ・キ〉…〈動詞〉かえる。回つてもどる。もとの所へもどってくる。／あるべき所に落ち着く。

※連珠〈レンジュ〉…玉をつないでつらねること。

※即〈ソク・シヨク〉…〈副詞〉すなわち。すぐさま。〈接続詞〉すなわち。／もし。万が一。／たとえ。「たとえ…し  
ても」と仮定の意をあらわす。

※黨≡党〈トウ〉…〈動詞・形容詞〉仲間同士でひいきする。えこひいきしがちな。

### 【解説】

〈その始まる所〉、そして〈その終わる所〉といわれていますが、これらが何を指しているのかを明確にすることが、右原文を理解するための必須の要件と考えられます。以下、原註、任註にどのようにいわれているのを見てゆくことにします。

原註には次のようにいわれています。

年月爲始。日時不反背之。日時爲終。年月不妬忌之。凡局中所喜之神。引於時支。有所歸者。爲始終得所。則富貴福壽。永乎無窮矣。

《年月始めと爲し、日時これに反い背かず、日時終わりと爲し、年月がこれを妬み忌まず。凡て局中喜とする所の神、時支に引き、歸る所あるは、始終所を得るとす。則ち富貴、福壽。永えに窮まるること無し。》

原註では、〈その始まる所〉は〈年月〉であり、〈その終わる所〉は〈日時〉とされています。

ご存じの方もいらっしゃると思いますが、四柱推命には人の一生を植物の成長にたとえた根苗花実こんびょうかという概念があります。年干支は「根」で、人生の始まりの根底をなすものであり、月干支は「苗」で、その後の基礎となる部分が養われる時期であり、日支は「花」で、人生で最も活動的な時期であり、時干支は「実」で、人生の総決算であり、すべてが結実する時期に対応しているという考え方です。

しかし、年、月、日、時の順に人の一生の時間の流れが対応しているとする、この根苗花実（こんびょうかじつ）の考え方は、大運・流年の概念と相容れないため、大いに問題があると考えますが、原註においては、この根苗花実こんびょうかじつのことは「当然ご存じのこと」として、何の前置きもなく類似したことをいつているものと思われまます。

また〈局中喜とする所の神、時支に引き、帰る所あるは、始終所を得るとす。〉「四柱八字において良好な作用がある干を時支に照合し、時支の蔵干がその良好さを保つことができるのであれば、それは帰るところがあることになり、始めと終わりがそれぞれところを得ることになる」といつていますが、前文、前々文で上下・左右をいい、その喉元のどもとも乾かぬうちに、干支を飛び越えて〈時支に引き〉、何らかの作用が発生することがある、と断定するのはいかなものかと思ひます。

次に任註をみてゆくことにします。

始終之理。要干支流通。四柱生化不息之謂也。必須接統連珠。五行俱足。

《始終しじゆうじじわりの理りとは、干支が流通し、四柱が生化し、これ息やまざるを要もとめるを謂いう。必ず須すべからく接統れんじゆ、連珠し、五行ごぎょう俱ともに足るべし。》

まず任註では、〈始終しじゆう〉に対する任氏の基本的な考え方が述べられています。その理は「隣接する干が相生の關係にあり、年月日時ねんげつにちじの順に五行の気が流れてゆく」といわれています。任註には、この解説のままの、次のように天干と一部蔵干が年月日時ねんげつにちじの順に相生するわかりやすい三例が掲げられています。

壬寅	戊戌	甲子
甲辰	庚申	丙寅
丁亥	癸亥	己巳
己酉	乙卯	辛未

右のいずれの八字も、年干に官殺、月干に印、時干に食傷があり、天干は年月日時ねんげつにちじの順に相生しています。生じるのはよろしく、剋するのはよろしくないという視点を採用している推命が日本には多くありますが、この任註の論を根拠にして、年月日時ねんげつにちじの順に相生する八字は無条件に良好であると断定しているものを多く見かけます。しかし〈始終しじゆう〉とはこのように単純で軽薄とも言える概念なので

しようか。

続けて次のようにいわれています。

即多欽乏。或有合化之情。互相護衛。純粹可觀。所喜者逢生得地。所忌者受剋無根。閑神不黨忘物。忘物合化爲功。

《即し多いとか、欠乏するとか、あるいは、合化の情があり、互いに相護衛するとかかするなれば、純粹にして観るべし。喜とする所が生に逢い、地を得る。忌とするところが剋を受け、根が無い。

閑神が忘む物を党めず。忘む物が合化し、功を為す。》

前文で〈必ず須く接続、連珠し、五行俱に足るべし。〉といわれていますが、なかなか理想の八字であることは少ないわけです。そこでここでは、多少の瑕疵がある場合が採り上げられています。なお〈純粹にして観るべし〉とは、「先入観を持つことなく、観ることをおすすめる」という意味です。

四柱干支。一無棄物。縱有傷梟劫刃。亦來輔格助用。喜用有情。日元得氣。未有不富貴福壽者也。

右のように論じ、任註は終わっていますが、訳註は省略します。

さて32から34までの三つの原文には、天干と蔵干、隣接する天干および蔵干の生・剋・幫の看方の原則論が述べられています。そしてこの35番目の原文は、三つの原文にいられていることを関連づけた結果として、それはある意味必然的にたどり着くことになる、四柱八字全体の生・剋・幫の看方であるものと考えます。それを〈始終〉といっているのです。

ところが以上みてきましたように、〈始終〉と既存の根苗花実こんびようかじつと同類の概念であるかのようにはわかれたり、ただ単に年月日時の順に五行が相生することが〈始終〉であるなどといわれたりしています。が、いずれも『滴天髓』の作者の意図するところから、大きく外れているのではないかと考えます。

最初に〈その始まる所〉、そして〈その終わる所〉の意味するところを明確にする必要があると言いました。最後にこの点に触れておくことにします。

四柱八字が構成されますと、干と蔵干が並び、その間に生・剋・幫の作用が発生しますが、四柱八字のあり方は千変万化となり、年が始まりであるとか、時が終わりであるとか、そうした問題ではなく、どこが始まりになるのか、どこが終わりになるのかは、その八字の干の構成次第と考えます。

もちろん、相生はよろしく、相剋はよろしくないなどといった偏った考えは誤謬ごびやうですから採用しません。四柱八字を統観し、上下・左右の視点から、四柱八字における生・剋・幫のあり方を見極める過程において、同時にすべてを看することは不可能ですから、思考の始めと終わりが発生する、これが〈始終〉といわれているのです。そしてこの〈始終〉の視点が、具体的な事象を知るための基礎になる、と原文はいつている、と理解すべきと考えます。

しかし、日干の強弱にも触れず、大運や流年を無視して、四柱八字だけで、〈富貴、福寿。永えに窮まること無し〉などと事象を断言できるはずはないのです。この点は完全に誤りです。